

新選組160年 実像に迫る

2023/2/4
読売

長州藩士ら尊攘派志士を急襲した池田屋事件など、幕末の活躍で知られる新選組は今年、結成160年を迎える。ゆかりの地では隊士の活動を伝える貴重な資料が展示され、隊の知られざる実態が記された史料の発掘も進んでいる。(多可政史)

■山岡鉄舟と親交

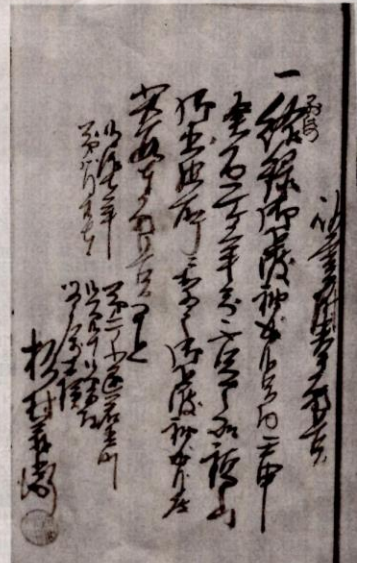
富山県で発見され、昨年大きな話題となった、新選組局長・近藤勇が着用したと伝わる甲冑が、同県の高岡市立博物館で3月21日まで公開されている。

史料には、幕末の江戸城無血開城に尽力した幕臣・山岡鉄舟が、親交のあった高岡市の国泰寺に近藤の甲冑を寄進したとある。甲冑は同寺の文化財調査の過程で確認された。今回の展示では黒漆の鍔や旗本の合印の一つ「輪貫紋」が付いた兜、籠手や袖などを組み合わせた、甲冑全体が復元されている。

近藤勇の甲冑公開



近藤勇が着用したとされる甲冑（高岡市立博物館で）



小樽時代の永倉新八の動向を示す「開拓使公文録」の一部。左端に当時の名前「杉村義衛」の署名と実印が見られる（北海道立文書館所蔵）

永倉新八 移住記録

■沖田総司と義兄

新選組にゆかりの深い、東京都日野市の市立新選組のふるさと歴史館では、企画展「新選組と新選組の兄弟」を19日まで開催中だ。

新選組屈指の天才剣士と呼ばれた沖田総司と、義兄の林太郎との関係を、史料を通じて検証している。

■小樽の暮らし

幕末史研究家の伊藤哲也さんは、北海道立文書館が所蔵する公文書である「開拓使公文録」から、新選組隊長・永倉新八に関する史料を確認した。「小樽郡へ入籍並ニ家禄受取ノ件」と題した明治7年（1874年）の記録で、永倉が北海道・小樽へ移住した際の転籍手続きなどが記されているという。

浪士組は結成した年に江戸から京都に入り、方針の違いから分裂。総司は京都に残り新選組に、林太郎は江戸に戻り新選組にそれぞれ所属した。その後の2人の交流が分かる書状などは見つかっていないが、近藤が池田屋事件の成果を新選組に伝えるなど、両隊は互いを意識していたとも考えられている。同館の高橋秀之学芸員は「節目を機に新たな史料が発見され、新選

時の署名や小樽で暮らした場所、家族構成なども書かれている。

永倉は晩年、地元紙の小樽新聞が企画した新選組の連載記事に協力したことで知られており、伊藤さんは「ゆかりの深い小樽と永倉の関係をより詳しく分析する手がかりになる」と期待する。今年刊行予定の隊士らの活躍を描いた本『愚直に生きた 下巻』歴史春秋出版で、史料の訳や検証内容を紹介する予定だ。

同じく幕末史研究家の伊東成郎さんは、明治・大正期の刊行物に埋もれた新選組に関する記述を紹介してきた。このほど、明治期の雑誌に掲載された、近藤と親しかった元桑名藩士の回想から「当番は十人の者が六人までは生命を捨てて」など、決死の覚悟で臨んでいた隊士らの過酷な活動を紹介する文章を確認した。新選組は昭和初期に刊行された小説家・子母沢寛の一連の著書で有名になったが、伊東さんは「新選組が広く知られるようになる以前の明治・大正時代にもまだ残された史料があるはず」と意欲を燃やしている。

節目を機に、新選組の新たな実像に迫る史料の発掘に期待が高まっている。